

〈私たち地域の経営対策〉

高冷地奥中山と

レタス栽培について

岩手県奥中山開拓
農業協同組合

佐々木 忠政

岩手県一戸町奥中山にレタスが導入されたのは昭和39年、本格的に栽培され始めたのは40年からである。昭和45年には野菜生産出荷安定法に基づく農林省の産地指定を受け、京浜市場向けの指定産地として、名実ともに新興産地にのしあがった。この奥中山のレタス産地について紹介しよう。

1. 産地の概要

一戸町奥中山地区は県北一戸町の南端に位置し、その中央を北上する東北本線と国道4号線をはさんで、西部の西岳(1,018m)の裾野にひらけた終戦後の開拓酪農地帯と、東部の緩傾斜の畑作地帯からなり、現在酪農を主体とした農業が営まれている。

この地域における農業の特徴は、本県でも唯一の高冷地帯、つまり標高450m前後という台地状を呈する火山灰畑作地帯である。

戦前は県北畑作の象徴とも云われた稗・麦・大豆の2年3毛作だったこの地域が、戦後大きく一変した。すなわち終戦直後から昭和32年頃までの乳牛導入、昭和34年をピークにして36年頃まで続けられた開田、そして昭和36年アスパラガスが導入され、以後39年以降現在に至るいわゆる野菜の導入期であり、野菜産地の形成期である。

もちろんその間にも、加工用アスパラガスが契約栽培として昭和36年に導入される以前、南部かんらん、種馬鈴薯等も栽培されていた。

現在の野菜産地化の直接のきっかけは、昭和36年野菜仲買業者がこの地区の自然条件に着目して、野菜作りにのりだしたところにある。

このような経過から、農家が本格的に野菜生産に取り組んだのは、昭和40年以降であり、現在レタスをはじめスイートコーン、短根人参、加工アスパラガス、キャベツ、白菜等いわゆる高冷地野菜が栽培されている。

流通段階は、従来殆んど業者に依存して来たのだが、当農協が野菜の組織的生産に力を入れたの

は、昭和43年からで、その後短根人参、レタスは農林省の指定産地になるなど、ここ2~3年間に農協の野菜取扱高は県下一にのしあがった。

第1表 奥中山と長野高冷地の気象の差異

項目	地名 奥中山 (430m)	長野 (1,000m)	長野 (1,200m)	盛岡 (参考)
年平均気温	7.7℃	9.0℃	7.0℃	10℃
全年降水量	1,257mm	1,500mm	1,848mm	1,157mm
初霜日	10月5日	10月10日	10月1日	10月6日
終霜日	5月23日	5月24日	6月3日	5月8日
初雪日	11月2日	11月15日	11月8日	11月11日
終雪日	4月22日	4月15日	4月18日	4月17日

地区内にレタスが導入されたのは昭和39年で、本格的に栽培されはじめたのは、翌年の40年である。

栽培当初は失敗の連続であったが、昭和42年県農業試験場の指導で燐

酸多投による

土壌改造

に成功し、それが収量の増加と農家の自信とに結びつき、年々その作付面積と生産量は増加の一途をたどり、地区内においてはスイートコーンに次ぐ栽培面積を有している。

レタスがこの地区に定着し伸びて来た原因は、

1. 土壌改造の効果による収量増。
2. 気象条件がレタス栽培に適している。
3. 栽培が比較的容易である。
4. 時期的に価格の不安定があるが、総じて収益性が高い。
5. 水田転作が容易である。

ことが上げられる。

このような訳で、年々栽培技術も向上し、昭和45年度には野菜生産出荷安定法に基づく農林省の産地指定を受け、京浜市場向けの指定産地として、名実ともに新興産地にのしあがった。

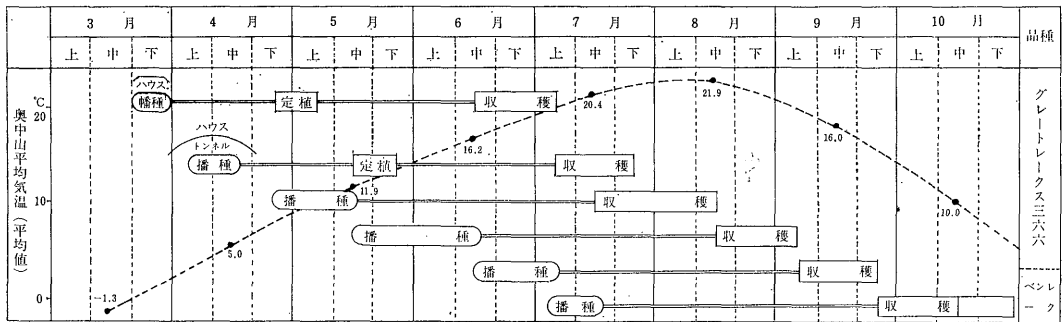
2. 栽培のあらまし(基準)

- ① 品種と作型(別項参照)
- ② 栽植距離 畦巾50cm×株間30cm, 10a当り6,670株
- ③ 播種量 10a当り, 100ml~120ml
- ④ 本畑準備(土壌改良)

レタスは酸性土壌を嫌い、燐欠地帯では生育が悪い。(播種前に酸度の検定を行いpH5.8~6.3<

第2表 レタス栽培面積の推移

年次	43	44	45	46
面積(ha)	7.3	11.0	20.0	45.0



らいまで矯正すること。) 磷酸吸収係数の7~10%を磷酸質肥料(溶燐)を耕起前に全面散布し、土とよく混和して改良する。また有機物を十分に施す。

⑤ レタス施肥例 (10a当り)

肥料名		量	N	P	K
元肥	堆肥	2,000kg			
	苦土炭カル	200kg			
	燐硝安加里1号	100kg	15	15	12
	B M ようりん	60kg		12	
追肥	硝加安NKE989号	40kg	7.2		7.2
計			22.2	27.0	19.2

⑥ 病虫害防除

- イ. スソ枯れ病, ダコニール 800 倍等
- ロ. 灰色カビ病 } スクレックス水和剤,
- ハ. 菌核病 } 1,000倍他
- ニ. 害虫 ヨトウムシ→サリチオン D.D.V.P 1,000倍
- ネキリムシ→ネキリトン粒剤

⑦ 収穫適期の見分け方

外見上は球の頭部の色があせた時で、十分結球したものから順次行。球の大きさを標準にしている、適期を失って腐敗する。

第3表 レタス標準出荷規格

選別	標準	容器量目		
LL	L	M	S	ダンボール箱
球締り良く品質形状良好なもの				
1個の重量	480g以上	400g以上	300g以上	5kg 入り目
1箱の個数	9個以内	12個以内	16個以内	5%

3. 経営・技術的問題点

当地区の1戸当りの耕地面積は3,4haという規模であり、ほとんどが畑である。この経営規模の中であってレタス栽培は、年々栽培面積、1戸当りの作付面積とも増加の傾向にあり、最高2haという農家も出ている。この中であって“連続生

産継続出荷”を前提に、3月下旬まき、4月下旬定植、6月上・中旬収穫のマルチ栽培からはじまり、7月下旬まき、9月下旬~10月上旬収穫までの多彩な作型であるが、現在の技術的問題点と対策を列記すれば次のとおりである。

① 作型

- イ. ハウス育苗技術に関する問題
- ロ. 夏どり作型の収穫率の低下(腐敗, 変形球等)
- ハ. 夏播秋どりの作型の安定(発芽不良)

② 連作障害によるスソ枯れ病等の多発、

→ 輪作体系の確立, 有機物の補給

③ 春先(5~6月)の強風, 早ばつ被害、

→ スプリンクラーの導入, 圃場整備

④ 火山灰土壌(酸性土壌, 磷酸吸収係数が高い)

→ 土壌改造の実施

等があげられる。また経営的に問題になってくるのは、

① 労働力の減少→労力の調達困難

② レタス栽培における収穫労力(ネック)→

10a当り生産量	3,000kg(600%)
販売単価	1% 300円
販売金額(A)	180,000円
種子代	700
肥料代	7,890
農薬代	6,100
その他資材代	
計(B)	14,690
出荷諸経費	
容器代	27,500
運送代	20,000
計(C)	47,500
手数料(D)	22,750
農家収入 A-(B+C+D)	95,060

機械化の困難性等が上げられ、栽培歴が新しく、まだまだ残された問題点があるが、総じて相対的生産技術の安定と、経営者自身の創意工夫とが更に要求される。

レタス栽培の標準設計 (10a当り)